

「日本はこれまでも数多くの遺跡観光地で支援を実施してきました。そのノウハウを生かせることが、私たちが協力する強みだと考えています」。こう語るのは、プロジェクトの総括リーダーを務める、株式会社コーエイ総合研究所の木村剛さん。スリランカのシーギリヤロック、ベトナムのハロン湾など、さまざまな観光地の発展



活動計画について話し合うワーキンググループのメンバー。今後は日本での研修も行われる予定だ

きな魅力となっているのだ。ところが、こうした人気の高さと裏腹に、バガンにはまだまだ観光面での課題が多い。まずは、受け入れ体制の問題だ。ホテル観光省の統計によると、2009年に約5万人だった外国人観光客は、民政移管後に急激に増加し、2013年には約20万人に達した。今後もさらなる増加が予想されるが、ツアーや観光商品の開発、観光案内所の整備、人材育成など、あらゆる方面での対策が迫られているのが現状だ。そこで去年、バガンの観光開発に日本が協力して取り組むことになった。

に貢献してきた、観光分野のプロフェッショナルだ。今回の最大の目標は、2017年までの3年間で、「バガン観光開発計画」を策定すること。そこで、「観光管理・体制」「観光インフラ整備」「観光人材育成」を三つの柱として、それぞれ試験的に取り組む活動の計画を立てることになった。

さまざまな立場を超えた「観光開発」を

まずは現地の行政担当者や、観光業界で働く人たちを集めたワー

キンググループを作り、彼らが主体となって話し合いを進めている。「常に相手の立場に立つことを心掛けています」という木村さん。集客、観光客へのおもてなし、交通や治安の改善など、多様な視点から考察するように導いたことで、メンバーそれぞれの得意分野を生かした活発な議論が展開されるようになった。今、計画が進んでいるのが、周辺の村と連携したツアーの企画だ。「観光客のお目当ては遺跡なので、基本的に滞在日数は少ない。そこで、漆器や織物といった伝統工芸品を作っている村などにも足を伸ばしてもらい、地域住民にも経済効果を波及させる狙いがあります」。他にも、土着信仰であるナツ山の聖地として知られるポツパ山を訪れるエコツアなども検討されている。また今回のプロジェクトには、旅行大手のJTBグループからも専門家が参加している。ツアーや商品開発に加え、ホテルスタッフや観光ガイドの育成にも、業界トップレベルのノウハウが生かされることになる。

一方、観光開発との両立が常に問題となるのが、遺跡の保全だ。環境社会配慮を担当する米川真美さんは、「ミャンマーは環境アセスメントに関する制度が未整備なので、日本のガイドラインなどを基に、現地の行政機

関と一緒に配慮すべき点について検討しています」と話す。規制がないため、現地には観光客が登ることができる寺院も存在し、遺跡への影響が懸念されているほか、ゴミの不法投棄といった環境面での問題も深刻だ。

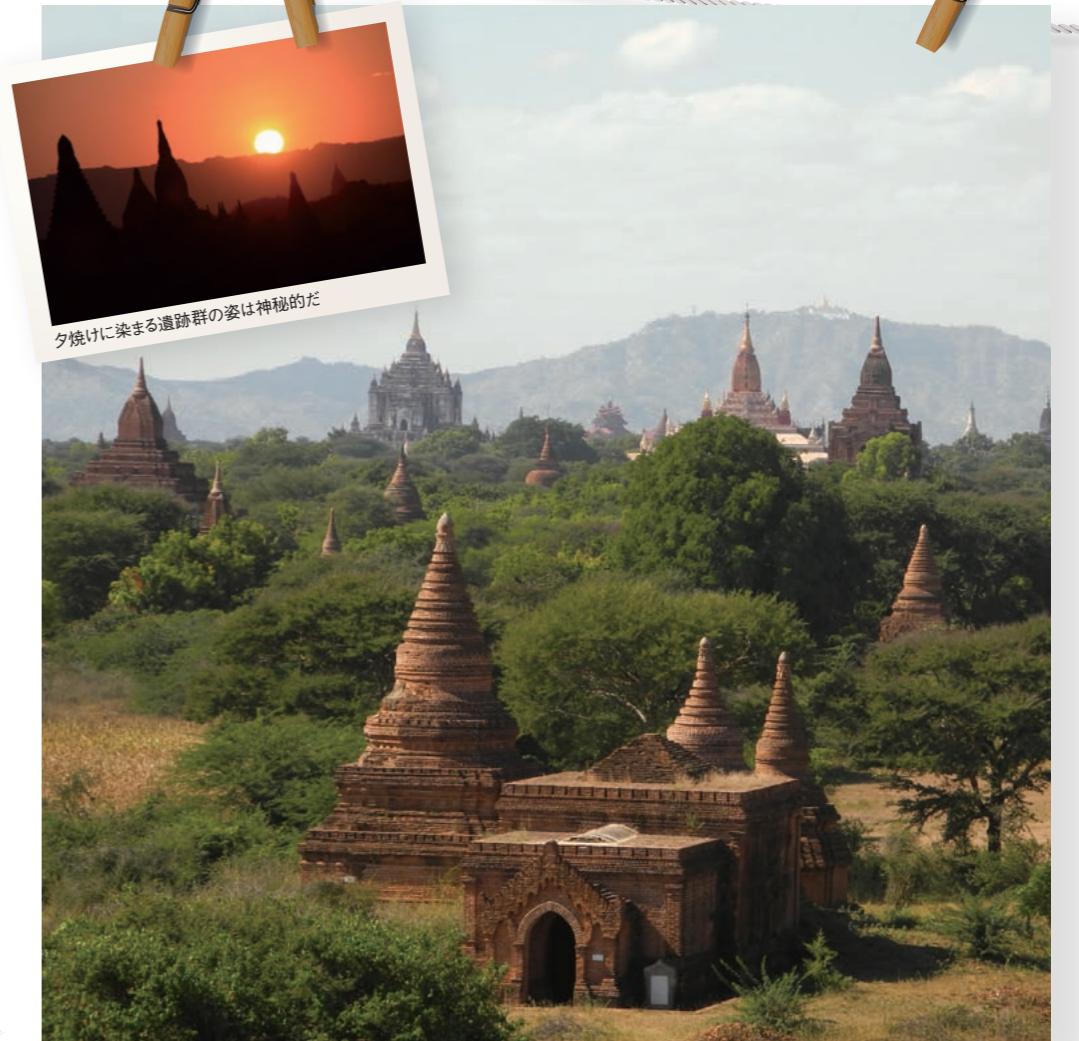


【右】さまざまな標識や看板が混在しているため、統一した案内板の導入が計画されている
【左】遺跡のすぐそばにもゴミが不法投棄されていて、地域住民や観光客への啓発活動が必要だ



課題が山積するミャンマー仏教の聖地

1番はフランス、2番がドイツ、3番目はアメリカ。これは、ミャンマー中部のバガンを訪れる外国人観光客（2013年）の上位3



夕焼けに染まる遺跡群の姿は神秘的だ

カ国だ。ミャンマー国内全体では、アジアからの観光客が約7割を占めているのに対し、バガンは欧米諸国の人たちから特に高い人気を集めている。その理由は、無数に点在するパゴダや寺院などの仏教遺跡。欧米人にとってそれらは大

from Myanmar

観光客増加をチャンスにつなげる!

ミャンマーが誇る世界三大仏教遺跡の一つ、バガン。観光地としてのさらなる発展を目指し、今、あるプロジェクトが進められている。成功への鍵を握るのは“官民連携”、そして“遺跡保全との両立”だ。



漆器が有名な西ブワソー村と、機織りの実演が行われているミンナントウ村。どちらも遺跡エリアから近く、観光客の取り込みを力を入れている

